

平成 22 年度 国際協力講座

— 生物多様性を学び、国際協力についての、自分なりのミッションを探る！ —

OECC 研究員 長谷 代子

地球温暖化、生物多様性減少等、地球環境問題は共通の課題であるとの認識の下、国や地域を超えて、様々な取組がなされています。国際協力講座は、(独)環境再生保全機構(地球環境基金部)主催の下、OECCが企画運営を担当し、国際協力について具体的なイメージを持ち、自ら考え、問題解決に向けて行動するための思考法を研鑽すること目的に、講師8名、受講生29名(高校生から70代までの幅広い年齢層)の参加を得て、10月24日(日)～25日(月)の日程で、金山プラザホテル/名古屋市国際会議場において開催しました。

毎年実施されている国際協力講座ですが、今年度の特徴としては、我が国が議長国を務める生物多様性条約締約国会議という貴重な機会を最大限生かすという観点から、会議傍聴の可能性を考慮し、第1日は平日(月曜日)と設定した点にあります。具体的には、1)生物多様性条約(CBD)の役割と展望、2)国際協力の現状、3)日本のNGO及びNPOの国際協力の実際と参加、という3つのサブテーマを設け、それぞ

れに対応する講師としてJICA、愛知県、企業やNGO等様々な立場の講師をお迎えし、ご講演いただいた他、夕食後にフリーディスカッションとして講師を囲んでの質疑・交流や受講生によるラップアップ(自己活動宣言含む)がなされ、参加者一人一人が、当該研修を受けてどのような刺激を受け、また今後にどのようなつながっていくかについて発言してもらいました。第2日は、愛知県名古屋市国際会議場に赴き、生物多様性交流フェア参加企業等のブースを見学し、様々な立場から生物多様性の保全や、環境問題への取り組みについて事業者等と自由な意見交換を実施した他、国際会議場内に入場し、作業部会やサイドイベントの傍聴を通して国際会議の現場を体験しました。

2日間という非常に限られた時間の中ではありましたが、こうした研修等により専門的な知識を身につけ、自らの役割を考えながら各々の現場に立ち、社会的背景事情の違いを踏まえつつも、コミュニケーションを十分に取り、お互いに連携することで自らのミッションを実現できる可能性が高まると信じています。

生物多様性交流フェア「OECC SATO-VILLAGE in LAOS」

OECC 技術部会

昨年度から OECC 技術部会では、ラオスで SATOYAMA イニシアティブを基調とした「SATO ビレッジ構想」に基づいて、生活と自然が調和した共生社会を築くプロジェクトを検討してきました。このプロジェクトをベースに、生物多様性条約 COP10 において併催された「生物多様性交流フェア」に、①SATO-ビレッジ構想や展開モデルの発表、②ラオス国の紹介、③OECC の広報、④会員の事業活動を紹介、PRすることを目的に、10月23日～29日の期間「OECC SATO-VILLAGE in LAOS」を出展しました。

来場者を OECC ブースに誘導するため“ビアラオ”を準備し、「ラオスのビール」の珍しさを話の端緒に、ラオス国の紹介(内容②)、SATO-ビレッジ構想の紹介(内容①)に加えて、実施団体である OECC や OECC を構成する会員の説明・紹介(内容③)を行いました。これが功を奏し、資料「SATO ビレッジ構想の展開計画」、OECC パンフレット・会員名簿な

ど、準備した部数はすべて完売。ビアラオも準備した本数がすべて消費され、一日平均約100名の方がブースを訪れました。また、会員の事業活動紹介については、事前に会員に出展協力依頼を呼びかけた結果、10月26日はいであ(株)、27日は八千代エンジニアリング(株)、28日は(株)テクノ中部がバイオテレメトリー技術及び環境技術について、OECC ブースで集中的に紹介したほか、8会員が保有する資料・パンフレット類を提供いただいたので常時展示・配布しました。会員 Day については、具体的な環境保全技術を紹介するブースは意外に少なかったため、来場者から非常に好意的な評価を受けることができました。会員がブースや国際協力講座で紹介した内容については、本号にも掲載いたしました。ブースへの説明員、応援員の派遣、資料の提供等ご協力いただきました会員、関係者各位にこの場を借りて御礼申し上げます。